

「鯉釣り」への雑感とエール

東北支部 阿部久雄

笠岡顧問とのメールのやり取りのなかで、久しぶりに鯉釣りの単行本「鯉釣り」(山本和由)が出版されたことを知った。笠岡顧問は多忙で書評には時間が必要であるから、とりあえず雑感を書いておく。アマゾンで著者と表紙と値段を確認して、翌日、書店で本をパラパラと見てイメージと一致することを確認して購入。値段(1300円)の割には紙質、装丁も好感触。プロローグとエピローグを精読、エピローグは好感触。本文は見たことの有る写真と解説が多いのが大いに気に掛かる。良く言えば価格低減、悪く言えば手抜き。

この本は魚別の釣り解説シリーズの中の一冊である。シリーズ本は全冊が納まる蔵書箱を用意して抱き合わせで販売すべきであろう?。そうすると読まない本(必要のない)が含まれていてもシリーズを丸ごと買わなければ気の済まない私のような物好きな人間もいるし、そうすることによって鯉釣りが、より多くの釣り人の目に触れるから。私の知る限りタイトルに鯉の文字が最初に登場するのは佐藤垢石の「鯉・公魚・タナゴ」である。この本もシリーズで発売(昭和18年)されたものであるが立派な蔵書箱がついている。

先日の記念大会で小西会員から大会用に贈呈された「鯉ゴイ釣り」を多くの会員が所望したのは、それが淡水研会員、記念大会ということ割り引いても意味を伴っていると想う。出版社側からは販売部数が伸びれば好著である。

販売部数は読者の購買意欲に比例するし、その著書が購買意欲を誘発する内容を伴っているからである。販売部数は好著たる必要十分である。

しかし、販売部数は名著であるための十分ではあるが必要ではない。名著であるための必要を小西茂木の言葉から引用しよう。

私は、これは良いと思う創案や工夫は秘密にしない。すべてを公開する。そうすれば何万何千という人に知られ使われ本当に良いものだけが、**受け継がれていく**、何が残り、何が見捨てられるかがわかる。(このフレーズは前回は引用した。名著とは、世代を超えて受け継がれるために必然にして、必要な内容を伴った著書のことであると私は想う。)

山本和由氏の「鯉釣り」が名著になるか、どうかは後世の釣り人の判断を待たなければならない。私は山本和由氏と面識はないが、鯉釣りを愛する一人として山本和由氏にはナンバーワンではなく、佐藤垢石のようなオンリーワンの釣り文士、釣り出版プロデューサー目指して欲しい。以上が、久しぶりに発行された鯉釣り本に対する雑感と山本和由氏へのエールである。